

香葉



2002—最終号—

NO. 31

目 次

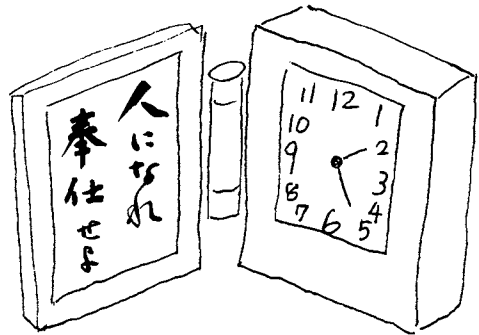
企画第1弾 横浜山手西洋館めぐり	1	
短大祭のお知らせ	2	
新学部の誕生を迎えて	古 城 房 子	3
学長挨拶	吉 田 博	4
ホームカミングデーの報告	7	
県央のつどい ご案内	11	
覚 え 書(29)	上 市 二 郎	12
コーヨースポットライト	斉 藤 一 正	15
実体験型取材-新学内の紹介-	浦 上 恵	18
ハンソン山から	21	
クラス会報告	24	
母校ニュース	25	
平成13年度決算・平成14年度予算	26	
賛 助 金	27	
編 集 雑 感	28	

表 紙

関 頼 武

カ ッ ト

K・O・U・Y・O・U



横浜山手西洋館めぐり at X'mas



山手ベリックホール

香葉会初めての企画です。横浜は文明開化の町。今、横浜の西洋館を保存し活用する動きがあります。クリスマス企画も用意されています。また外人墓地では、関東関係者のお墓も多く案内の方と一緒に参りできればと思います。皆様どうぞご参加下さい。〈雨天決行〉

日程：2002年12月14日（土）

会費：1,000円 資料代・入場料などとして

集合：13:00

■コース（予定）

—— みなとの見える丘公園 集合 13:00 ——

大佛次郎記念館——山手111番館——イギリス館——山手外国人墓地
——山手234番館——エリスマン邸——山手ベリックホール

解散 16:30

☆山手外人墓地——関東学院に関連したお墓を案内していただきます。

☆山手ベリックホール——2002年7月にオープン

セントジョセフカレッジのゲストハウスでした。

申し込みは官製葉書またはFAXでお願い致します。

住所・氏名・電話番号・卒業学科・年度をご記入下さい。

申し込み締切 11月25日（月）

【問い合わせ】 香葉会事務局（関東学院女子短期大学内）

〒236-8503 横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話 045-787-7859

FAX 045-787-0678

「香葉会企画」は会員との交流を目的に開催して行きます。

短大祭

グリーンフェスティバル



新校舎 エテルニテ

11月2日(土)～3日(日)

AM10:00～PM4:00

3号館 1階

昨年には多くの卒業生を迎え、楽しい一時をおくることができました。今年も、短大2年生が最後のグリーンフェスティバルに向けて頑張っております。新しい建物と大学に変身した短大を見学にお出かけ下さい。

喫茶室にはコーヒーとクッキーを準備しております。香葉会会員の手作り小物の販売も致しております。お気軽にお立ち寄り下さい。



新学部の誕生を迎えて

会長 古城 房子



短大から生れ変わった人間環境学部の開設を心からお祝い申し上げます。

四月四日に新校舎の献堂式、五月十八日に多数の外部のお客様を迎えて開設記念式典がとり行われました。女専から短大へ……の五十六年を経て再々出発の新学部の入学者は四割の男子学生を交えて七〇〇人となり四七〇名の定員をはるかに越えて、先ず／＼の出發で喜ばしいことです。短大最後の学生、二年生が六〇〇人在校中ですが、「女性の園」であった室の木の校地も大分雰囲気が変わっているようです。ルツ寮のあった場所に、外観も曲線を描いたすばらしい校舎（エテルニテ）が新築され、この号で紹介しております。秋には、最後のグリーンフェスティバルが開かれます。香葉会も参加して「香葉の部屋」を開きます。この機会に、是非お出かけになって、新しいキャンパスをご覧戴きたいと思えます。

来春、最後の卒業生を送り出すと、短大はなくなりますが、香葉会はこのまま続けてまいります。只、会費収入がなくなりますので活動範囲は狭くなりますが、何らかの形で通信は続けていきたいし、皆様に興味を持っていただけるような企画も考えております。その為、年会費を納めて戴くことになりますが、会を支えていくため、ご理解とご協力をよろしく願ひ致します。短大の伝統を生かした新学部の発展と成功を心から願っております。

会員の皆様の応援を期待しております。

学長挨拶

関東学院女子短期大学学長

吉田博



謳歌されることを願っております。

四年前にスタートした関東学院女子短期大学の構造改革も昨年の十二月二〇日、文部科学大臣名による「人間環境学部（現代コミュニケーション学科、人間環境デザイン学科、健康栄養学科および人間発達学科の四学科編成）」の設置認可書授与という形で一応の決着を見ました。その後、諸課程の認可も、本年一月に厚生労働省より健康栄養学科に、「管理栄養士養成課程」の設置認可が、二月に人間発達学科に「保育士養成課程」の設置認可が、三月に文部科学省より人間発達学科に「幼稚園教諭一種免許状」の認可が下り、関東学院女子短期大学か

季節は秋を迎えようとしておりますが、香葉会の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。日々、健康でエネルギーッシュに人生を

ら人間環境学部への改組転換は計画通り、すべてが完了いたしました。

思えば六年前、女子短期大学の置かれた現状もわからずして短大学長に選出され、「一八才人口の激減」、「女子の四年制志向」、「共学志向」、「資格志向」という時代的背景の中で女子短大としての歩むべき道の選択を迫られました。その歩むべき方向にさしたる確信もなく、教職員の方々も、「短大丸は何処へ行くのか」と不安であったというのを聞いておりました。

しかし、当時の私の思うことはたった一つ、極めて抽象的ですが、「女子短期大学の五十年の伝統とその精神を伝えていくこと」でした。そして女子短期大学として存続できるものならば存続したかった、というのが私の本音でした。しかし、四年ほど前に理事会に依頼した神奈川県下の三〇〇〇人の高校生の「高等教育に対する意識調査」は、女子短大として存続したいという私の願望を根底から覆すものでした。その調査結果は、四大志向が九十三パーセント、短大志向が四パーセントというものでした。

現在、神奈川県下の十八才人口は九万八千人です。神奈川県下の高等教育への進学率は全国トップの五十二パーセントで、その数は約五万人、そのうち四大志向は四万六千人、短大志向はわずか「二千人」です。二〇一〇年までで十八才人口は激減し、県下には十八校の短大がひ

しめき合い、関東学院女子短大だけでも毎年、八百人を越える入学者を必要としている。関東学院女子短大は存続していきけるのか、関東学院女子短大の「五十年の伝統とその精神」を生かす道とは、教職員が教育に情熱を注ぎ込むことのできる教育環境とは、香葉会の諸先輩方に受け入れられる構造改革とは、四年前の私の日々は試行錯誤の連続でした。そして試行錯誤の後、関東学院女子短期大学の歩む道は、「関東学院女子短期大学を母体とした四年制新学部への発展的改組転換」であり、その最大公約数が「関東学院女子短期大学を人間環境学部」に改組転換する」という道であると確信いたしました。

人間環境学部の教育目標は、本学院がミッションスクールであることを再認識することから始まり、「人間と環境の関わり」について新たな視点から総合的にアプローチをはかり、「人間活動のあり方」を探求していこうとするものです。現在、全国には七〇〇校近い大学があり、学部あるいは学科の名称に「環境」という文字が入る大学は一四二校ほどありますが、学部・学科名は必ずしも体を表してはおらず、同じ名称であっても大学によってその内容は異なっております。それは「環境」という概念が一樣でないことに起因しております。

人間環境学部では、「環境」というものを狭義の「自然環境」の視点からではなく、生活環境や社会環境や文化環境のように人間活動の種類に応じた仕方環境を広

く捉え、コミュニケーションやメディアや人間のネットワークをも包括する広義の環境を「人間環境」の概念として発展させていくことにより「人間を中心」とした特色ある教育を目指したいと考えました。すなわち、「現代コミュニケーション学」では、文化への深い理解を基礎に、実社会における実践的活動を積極的に行なうためのコミュニケーション、ビジネス活動、情報メディアを、「人間環境デザイン学」では、社会の持続的発展と共生を視点としたライフスタイル設計、生活環境デザイン、環境保全を、「健康栄養学」では、人間が健康に生きるために必要な食生活環境、健康管理を、「人間発達学」では、人間が心身ともに健やかに発達するための家庭環境、子育て環境、コミュニケーション環境を主要なテーマとし、また既存の学問領域である「生活環境学」からさらに一步踏み込んで、「人間のあり方」とともに「人間と環境との関わり」について教育・研究に取り組んでいくことにしております。

初めての入学試験が本年一月末に行われました。厳しいハンディを背負いながらも応募状況は良好で、入試倍率も六倍を超える高倍率を示し、後期日程の一般入試では二十倍を超える学科もあり、目的意識を持った優秀な学生を集めることができました。先日、公表された大手予備校の偏差値結果も、関東学院大学の五学部の中で人間環境学部がトップという結果を示し、これも関東学院

女子短期大学が築き上げてきた実績の結果と受け止めて
おります。

数年前に理事長名で出された「学院構造改革大綱案」
に端を発した女子短期大学の構造改革も人間環境学部へ
の改組・転換という形で一応の決着をみました。しかし、
学部や学科が新たに設置されただけでは構造改革が実現
したことはありません。私は、このたびの改組転換を
推進していくなかで教職員一人ひとりの教育に対する姿
勢の大切さを再認識し、教育改革の成否を左右するもの
は教職員の教育に対する熱意と、創意工夫以外の何物で
もないことを実感しております。新生・人間環境学部で
は、二十一世紀に生きる若者に、「次代を担い、社会に
貢献し得る力と希望を与えることができる」、そのよう
な学部でありたいと願っております。

「香葉」の皆さまには、今後も「関東学院女子短期大
学の母体」のもとに誕生した人間環境学部の行く末を温
かく見守っていただきたいと思います。そして、関東学
院女子短期大学の卒業生の母校は人間環境学部である
と思っていたかと思いますが、そして、お子さんやお
孫さんをこの学部にお送り願い、「人間」および「人間
と環境との関わり」について、二十一世紀の「人間活動
のあり方」をともに考えることができたらと考えており
ます。

会員の皆様へ

香葉会「年会費制度」導入についてお願い

短期大学の改組転換を受け、香葉会の新会員は平成15年3月の短期大学卒業生が最後となります。

香葉会は毎年卒業生（新会員）が支払う香葉会会費によって活動してまいりましたが、平成16年から会費収入がなくなります。これからは年会費制度を設け、会員自身が香葉会を支えて行かざるを得なくなりました。

この先香葉会の活動も形は変わると思いますが、会員の皆様と関東学院をつなぐ役割を果たして行きたいと考えております。

つきましては香葉会活動維持のための年会費制度導入をご理解いただき、多くの方のご協力をお願い申し上げます。

年会費はおひとり1,000円程度を考えています。

香葉会幹事長 井上啓子

ホームカミングデー の報告

(英3) 飯田 冴子

香葉30号の扉を開いた途端、ぱっと目に飛びこんで来た「ホームカミング



英文科集合…!! ～年までの卒業生かな



若者…英文科 先生を囲んで…

デー」開催のお知らせは私にとって、青春の思い出の一卷の終りの様な重々しく淋しい集まりに思われた。
然し、その思いは、私の新学部に関する情報不足の狭い視点からの考えだった事が「ホームカミングデー」に参加させて頂いて、よく解ったのです。
「ホームカミングデー」に、さかの

ぼる事、一ヶ月前の10月29日、我が短大英文科Bクラスのクラス会が、と云っても有志会の様な十名余りの集まりが、浦賀の「高知や」ドック(船舶用)で催され、潮風の吹きつけるキャンピンの様な会場からはガラス張りの向うの海が、きら／＼輝き、遙か対岸の房総半島が蒼く霞み、小舟が舳つて、とても穏やかな景観で、しばし景色に見とれてイタリアンのお皿も持て余すほど、やがて50年前の短大生に、いつの間にか戻ってガヤ／＼楽しいおしゃべりに時の経つのも忘れて夢中……。矢張り、そこでの話題は「ホームカミングデー」のこと、「短大がなくなってしまう、これが最後の同窓会だから何はともあれ参加しましょ」と、10数年御無沙汰の関東学院へ私も行く気になり数人と当日の約束をしました。

平成13年11月23日、「勤労感謝の日」で「ホームカミングデー」……女専や短大の卒業生が、ぞく／＼とチャペルに集結し入り切れない程で余りの人数にびっくり、振り向けば上段に恩師

の懐かしいお顔がずらり…… やがて
敵かな礼拝、続いて吉田 博 学長の御
挨拶、初めてお目にかゝる学長の御人
柄からしみ出る教育に向き合う熱意と
短大を生まれ変らせ「人間環境学部」
を誕生させたご尽力の成果の自信の様
なものを感じ思わず、お話に引きづり
込まれ「人間環境学部」とは素晴らしい
未来に輝く時代のニーズにそった希
望の星であると、確信し、その母体の
女子短大の卒業生の一員である事に誇
りを持ちました。

引き続きパイオルガンのズーンと
胸を突き抜ける様な心に渗みる演奏会。
手際よく運ぶ総会。その後、軽食を和
やかに語り合いながら戴き、次に記念
写真撮影と盛り沢山な企画でした。

一階では短大時代のセピア色の懐か
しい写真などが並び、中庭では学生達
のバザールが催され色々楽しいお土産
を買って出ると竣工間近い学舎ビルが
聳え建ち「四年制」「男女共学」の
「人間環境学部」の存在感をアピール
してる様に感じとれました。

とりとめのない事を書かせて頂きま
したが「ホームカミングデー」の一日
が、私の人生にとって大変充実した思
い出の日だった事を皆様にお知らせし
たかったのです。

(幼19) 渡部 真紀

パイオルガンの荘嚴な音に包まれ
たコンサートのと各科に分かれて懇
談の時となった。どのくらいの人が来
るのだろうか。知っている人はいるのだ
ろうか。ひとりで参加した私はドキド
キしながら会場へ向かった。

幼児教育科演習室を訪れるのは約10
年ぶり。ここで空き時間に本を読んだ
り、お弁当を食べたりした学生の頃を
思い出す。室内の雰囲気は変わっても
演習室のみなさんが変わらない優しい
笑顔で温かく迎えて下さり、ホッと安
心緊張がほどける。「ただいま」と我
が家に帰ってきたよううれしかった。
様々な年代の人の話を聞き、先生方と
お話しすることができ、また久しぶりに



久しぶりの讚美歌…!!

中田先生のアコーディオンを聞き、楽
しかった授業を思い出した。結局、同
期の人は、たったふたつで淋しかった
が、懐かしく楽しいひとときであった。
「短大」の名は失ってもきつとそこ
には、「心」が残引き継がれていく
と、この会に参加して感じた。また何
年後、集まる時があるといいなと思
いながら海沿いの道を駅に向かった。

(国1) 沖野 啓子

五年ぶりの八景駅。海岸沿いの道をゆっくりと歩く。学生時代に通いなれた道ではないけれど、やはり懐かしい風景。こうして母校を訪れる機会を作って下さった委員の方々に感謝します。

チャペルの会后、岡松先生を囲んでの国文科一期生の同期会。国文研究室での思い出や、厳しかった先生方や授業



チャペルは集まった卒業生でいっぱい

の事等、気分は学生時代のまま。でも、いつのまにか細かい文字には、老眼鏡を取り出す世代になっていて……。寂しさはあるけれど、これも年月の流れ。短大での二年間で得たもの、友情は、これからも続くと確信した一日でした。

(国1) 古澤 愛子

昨年十一月二十三日の短大としての最後のホームカミングデーに仙台より参加しました。

当日記念式典の後にはそれぞれの思いを込めた多くの集まりが行なわれました。私達国文科一期生も有志の方が同期会を開いて下さいました。久しぶりに訪れた学校では美しいパイプオルガンの響きに触れ、懐かしい先生方のお顔を拝見し、心は一気に学生時代に戻りました。岡松先生を囲んでの同期生との再会は時を忘れる程楽しいものでした。素晴らしい会を開いて下さった役員の皆様には感謝します。これで短大としての歴史が終わると思うと残念

ですが、大学としての新しい歴史の始まりと捉えて関東学院の益々の発展を祈ります。

(家12) 村岡 愛子

昨年十一月二十三日いよ／＼短大から四年制大学に移行して行く中で行われた短大祭、これを記念して「ホームカミングデー」という名のもとで卒業生全員に呼びかけた同窓会が開催されました。準備の段階で皆に楽しんでもらえる様にと思いめぐらしておりました。開場するやなんと七〇〇名近くの卒業生が集まりました。礼拝堂は人／＼で埋まり、私達裏方はサンドイッチと飲物の袋詰め配布、受付等、天手古舞で嬉しい悲鳴。会場の中は和やかな雰囲気から始まる同窓会総会が開かれました。終わって昼食をする各科毎の場所の校舎に移動しました。香葉会の部屋の前で卒業生らしき方が立っていらしたので声をかけましたら家政科とのことでご一緒に校庭を歩

きはじめお話しした所、なんと在学中授業を受けた山下多恵子先生ではありませんか。当時の事が頭の中に浮かびとても懐かしく思いました。食事をしたがら思い出話をしました。四十年近く年月が過ぎていのにあの頃のお声、お話の仕方、すっかりタイムスリップしました。私共の年代になりますと亡くなられた先生方が多く残念に思います。お元気な山下先生にお会いでき、大変嬉しく思いました。今年は四年制大学に生まれ変わった節目の年、関東学院の『人となれ 奉仕せよ』の言葉を心に留めてこれからも益々発展して行くことを一卒業生として温かな気持ちで応援して行きたいと思えます。

人生設計のエスキスのすすめ

(生活文化専攻主任) 水沼 淑子 先生

生活文化専攻に住居コースができて10年になります。今年度のグリーンフェスティバルの際に、香葉会(卒業生の同窓会)が全卒業生に呼びかけてホー

ムカミングデーが開催されました。生活文化の卒業生も少人数ではありましたが懐かしい顔を見せてくれました。プレハブ会社に勤めていたけれどリストラで営業所が閉鎖されると悩んでいた、大学にUターン編入したり、三児の母をしっかりとやっていたりとその人生はさまざまです。女性の人生は、ある意味で選択の幅があり自由であるからこそどう生きるかを決めることが大変なのかもしれません。

そんな時、思い出してみてください。皆さんが学んだ科目の中には、何もないところからエスキスを重ねて計画を練り、実行し作品として完成させる(更に評価を受けて反省する?)という、人生を設計し実行していく上で大切な「生きる力」を修得できるプロセスが含まれているのです。更に短大での二年間、授業に遅刻せず出席し、試験をクリアして卒業に必要な単位を取得するには「努力と根性」が不可欠で、二年間真剣に学べばおのずとそれらも身に付くはずですよ。

卒業生の皆さん、在学生の皆さん、人生の分かれ道に立ったときには、身につけているはずの生きる力を信じて、もう一度自分の人生設計のエスキスをしてみてください。きっと良い案が見つかるはずです……。

(「室木」22号より抜粋)

『裏方裏話』

(経10) 浦上 恵

「七〇〇人分で行きます。」と言われて、つい習慣で「ハイノ」とスグに返事したが、時間差でその言葉の意味を理解したワタシは思わず声を上げた。『んあ!?!』

七〇〇人分!?!

「二〇〇人

前後で。」という、当初の私たちの予想を遥かに上回り、七〇〇人分の軽食を準備



当日のサンドウィッチバック…

備することになった。サンドウィッチを発注していたパン屋さんは、ビックリして店長さんから直々に確認の電話が来るというパニックぶりだったとか……。

当日、卒業生のみなさんに配られたランチパック（軽食）をセットするというのが、ワタシ達の仕事だった。サンドウィッチとドリンクをパックに詰めるという、極めて単純で簡単な作業に思われるが、いや、思うでしょ？ところが、サンドウィッチは生モノなので前もって準備するという事は出来ななし、入場時に来てくださった方一人一人にお渡ししなければならぬということから、サンドウィッチが届いてから、チャペル入口脇の狭いスペースで猛スピードで詰めましたよ。ガツガツ詰めましたよ。もう、冬も目前だといふのに、汗だくになって。（笑）

はじめはムダの多かった作業も五分ほどで要領を得て、スピードUPノそのうちノってきて、更にスピードUPノ七〇〇人分のランチパックは、何と

か無事に来場者の方々に行き渡ったのでした。

全てが香葉会にとって、はじめての試みだったのでそれはそれはドキドキの連続だった。果たしてみなさんが来てくれるのだろうか？どうしたら学生の頃のキモチに戻ってもらえるだろうか？などなど、様々な不安と葛藤しながら試行錯誤して企画委員会は当日を迎えたのだ。

でも、そんな心配は無用だったのだ。あんなにも沢山の方が来場してくれて、そして、学内に一歩足を踏み入れた瞬間から、学生の頃の顔に戻っていた。

久しぶりの先生方との再会、懐かしい仲間との楽しいおしゃべり、なにより心地よいこの空間。

少し、様子が変わってしまったけど、何年経っても、何十年経っても、ココは私たちの母校であり、スタート地点なのだ。それを実感した一日、正に「ホームカミングデー」だった。

第22回 県央のつどい ご案内

恒例の燦葉会との合同同窓会「県央のつどい」が開催されます。

海老名・厚木・近郊の皆様、是非ご参加ください。

日時 平成14年11月16日(土) 午後6時より
場所 上海菜館(本厚木南口ハピネス6階) ☎046-228-5956
会費 男性 6,000円 女性 4,000円

申込先 〒243-0803 厚木市山際987-2 高田喜八様 宛

官製ハガキに香葉会・学科・卒業年度・住所・氏名・電話を明記の上、11月10日までに直接お申し込み下さい。

問い合わせ 香葉会(月・水・金) ☎045-787-7859

覚え書(二十九)

—女専・短大小史—

上市二郎

集まれノ卒業生、ホームカミングデー「香葉」第三十号記念号で特に大きなゴシック活字を用いて第一頁を飾られた案内、時は平成十三年十一月二十三日(金)勤労感謝の日、朝からすばらしい良い天候に恵まれ十時少し前に家を出て学校へ向った。横須賀海岸通りはマラソン大会の為か人出が多く大変賑わしい状態だった。女子短大へ着くと、今日の出席者は五百人以上になるらしいとか耳にしながら、チャペル三階の受付へ昇って行った。最終的には今日の出席者は七百名弱とのこと事務局からの知らせを受けた。何しろ七百五十名分の軽食を用意した処が全部捌けたと云うことで、勿論お子様達も加えられていたことは当然だった。女専・女子高・短大及び第二部の卒業生、本当に懐かしい顔くが統々と連なり、それに加えて古い先生方も沢山ご出席下され実に懐かしいひとときを過ごすことが出来ました。余りにも大勢の卒業生で顔をチラッとゆきずりに顔を合せて頭を下げるのがやっとな、という状況でしたので皆様に大変失礼したと思っております。当日の行事は予定通り紙面にある如く

初めに礼拝、学長先生の挨拶、総会、パイプオルガン演奏会、そして食堂にての懇談会でした。これが出席された会員の心に残る一日だったと聴いています。そのためお話しが出来なかつた方々とは後日お手紙の交換で当日を忍び話し合いを致しました。今回の計画について色々準備し、なおまた当日早くから種々お手配下された役員の方々のご苦勞を心から感謝しています。

第五十一回女子短期大学の卒業式が平成十四年(二〇〇二)三月十九日(火)短大のチャペルに於いて挙行されました。午前九時三十分より専攻科英語専攻 五名、英文科 百五十五名、幼児教育科 百十八名、経営情報科 百二十二名、計四百名。午後一時三十分からは専攻科食物栄養専攻 三名、国文科 八十六名、家政科 二百三十一名。内訳 家政専攻 八十三名、生活文化専攻 六十四名、食物栄養専攻 八十五名、計三百二十名。依って午前の部は四百名、午後の部は三百二十名のため本年度から香葉会員が七百二十名増員となりました。前にも記述してありますが、関東学院広報や短期大学の月報が毎月届きますので色々の行事やその他の流れが良く解り大変感謝しています。本年は筆者も学院を定年になってから早いもので十八年目を迎えています。従って八十路に入ってもう、みとせ目を歩み続ける毎日です。色々の情報が与えられますのでポケ防止の一つにもなり生きがいになる糧ともなっているのでしょうか。ひた



短大正門よりの眺め（エテルニテ）

すら感謝しての生活です。我々の良く存じ上げている先生方の動向をお知らせ致します。四月の月報に次の記事が掲載されておりました。名誉教授の称号授与……平成十四年三月二十三日開催の理事会において、小玉敏子教授、宮川喜代江教授、岡松和夫教授に女子短期大学名誉教授の称号を授与することが承認されました。

次に学院広報に依ると三月三十一日付で定年退職される先生は女子短大の家政科 和田淑子教授（在職二十六

年）同じく手嶋

登志子教授（在

職二十四年）幼

児教育科 犬木

瑛子教授（在職

二十五年）経営

情報科 折橋徹

彦教授（在職三

十四年）諸先

生方に対し心か

ら大変ご苦労様

でしたと申し上げ

ます。なお、

和田淑子先生は

人間環境学部健

康栄養学科の特

約教授として、犬木瑛子先生も人間環境学部人間発達学科の特約教授として共に平成十四年四月一日から平成十五年三月三十一日まで残ることになっておりました。

関東学院大学人間環境学部開設記念式典ならびに祝賀会のご案内の書状を本年四月二十五日に落手致しました。文面は……本学では本年四月に女子短期大学を改組し、人間環境学部を開設いたしました。これもひとえに皆様方のご支援の賜と深く感謝申し上げます……云々。時は五月十八日（土）記念式典十一時から五号館チャペル。祝賀会は十二時から人間環境学部新棟（エテルニテ）。生憎筆者は歩行困難なる状態にあって検査入院の日程が組込まれていましたので甚だ残念でしたが欠席のご返信を差し上げました。

本年の入学者選抜状況を五月中旬過ぎに拝見致しますと他の学部と同様、この新しい学部も受験生が多く、現代コミュニケーション学科。人間環境デザイン学科。健康栄養学科。人間発達学科の四教科。何れも受験生多く優秀な学生が得られたことと思えます。これらの学科名を拝見すれば従来の女子短期大学で行っていた学科内容と比較され、ば自ずからご想像がつくことと思えます。

第二ルツ会について……三月中旬突然一通の葉書が参りました。第二ルツ寮のメンバーで、来る三月三十一日に鎌倉に於いて一泊してのルツ会を開き、翌四月一日に



短大2号館前

が実現したとの事でした。筆者も学校まで車で三十分位なので出掛けてみました。学校に着いた頃は彼女達は予定より早く着いたとかで、同窓生の職員に案内してもらって学内を見学中でした。そして丁度図書館等の案内が終わったところで皆さんにお目にかかりました。今回は三名の欠席者が出て九名とのことでした（写真参照）。もし教室の見学とお茶を手にしたの懇談のひとつきを過ぎました。これを最後にして金沢八景へ、そして、シーサイ

は卒業後四十年振りにて短期大学を訪問する。この事では非筆者にも学校迄ご足労願ひ懇談のひとつきを持ちたいとの事でした。このメンバーは昨年浜松の館山寺に於てこのルツ会を開いてとても楽しかったので、本年も世話役が交代してこの様な計画

ラインで新杉田を経て、横浜駅は午後三時半頃、こゝで解散とかの予定で去って行きました。

……第二ルツ寮とは昭和三十四年から三十八年三月末まで、国道十六号線を八景駅に向い、途中六浦橋から左折して鎌倉道に入り約二百メートル程入った右側に田中医院がありました。その医院の別棟を短大が借用して、第二ルツ寮と命名して学生が生活していました。学内の寮を第一ルツ寮、学外のこの寮のことをそう呼称していました。……

会員の皆さん、卒業生が老いも若きも一つになって家族の如く語り合える場所は、機関は、それは「香葉」で会員の皆さんが大いに利用して交歓して下さることを心から希望する者です。第三十号の「短大五十年を振り返って」の座談会でも女専・女子高・短大で生活した会員の声が総べてのことを物語っています。そしてこの三十号の編集雑感に目を通しますと、この号が最後の様な印象を受けた処もあります。が「香葉」は古城会長の言の如く会員数も三万人の大世帯であり会員皆さまの力で守り立て、行かねばならない様に感じます。各方面に活躍している会員の動向をつかみ、お互いに発表して共に楽しい人生を送る機関雑誌としてはどうだろうか。その為には年会費とか援助資金を積極的にご協力を願う者の一人です。大いに皆さまの力で盛り上げて行きましょう。

コトヨリスボットライト



懐かしき学生時代

(英II) 齊藤 一正

短大が大学の学部生まれ変わるとの香葉誌記念号に記載された記事に往年の事柄が脳裏に浮かび、短大の最後に当たり、当時の事を記事に纏めてみようとして散文式に書いてみた。昭和二七、二八年当時の事ゆえ、又、私も七五才を迎え多少記憶違いがあるかも知れずご容赦下さい。

私が関東学院短期大学英文科第二部に入る動機は、当時私は横須賀米海軍基地に(進駐軍と当時呼ばれていた)就職していました。毎年〳〵人員整理がありその度毎に心を悩ませていました。その解決策として、学校の教師の資格を取得し、いざというときには教師になろうと考え入学しました。当時、京浜急行の黄金町駅に降りあの急

な階段(雨降りの時、滑り易く女性でヒールを履いている人がよく滑り落ちていたのを思い出す)を下り、近道のお墓の中の坂を通り抜け宣教師で英会話を教えてくださったニコルソンさんの邸宅の脇を通り通学していました。クラスもAとBがあり試験の結果により分けられていました。

鉄筋コンクリートの校舎の教室で、冬は厚い外套を着てマフラーをしての授業、礼拝はすぐ下の木造の雨天体操場で行っていたが、次の年新しく礼拝堂ができ、それ以来そこでおこなったこの礼拝堂にてシェークスピアの劇を上演したことが蘇える。

我々が二年生になった時、生徒会でシェークスピア作品の上演の可否が問題として提議された。それは前年度の卒業生が赤字をだして、それを残して卒業したからで、我々二年生として、我々の年で止める事は、将来、必ず悔を残すものと、市川学生委員長と仲間が絶対に赤字を出さないとの約束を明言し賛意を得た。六本木の俳優座に衣

装の借り出し、演劇の指導を俳優座の演出家に依頼し、その演出家と黄金町より戸部方面への道なりにあった中華飯店で必ずチャーハンを共に食事した。新チャペルでのシェークスピア作品の上演は成功の内に終わり、これも偏に光畑先生(アダナはライオン、頭の髪を乱しての講義から)の熱心なる指導、俳優座よりの演技の指導の巧みさ及び演技者を始めそれを裏で支えた仲間が自分の時間を犠牲にして尽くして戴いたものであったと想う。その後ずっと後輩にて引き継がれている様子、あの時、何としても絶やしては成らぬと頑張っつてよかったと想う。

授業で、特に音声学は必須科目で毎時間終了間際に試験があった。期末試験では有名なアブラハムリンカーンのゲーツバーグでのアドレスを暗記しそれを発音記号でそれにイントネーション調を入れての試験、一字の違いでも五点マイナスで、小生なんか試験中に先生に君はマイナス一五〇点と言われたが、普段の試験がマアマアであった

ので単位は戴いた。この音声学の単位が貰えない悩みで、既に就職が決まっ
て先生として就職したがこの音声学の
単位が取得できず、卒業証書が貰えず、
自殺してしまつた人があつたと聞かさ
れた。卒業後、光畑先生のお宅に二、
三人で訪れたことがあつたが、後輩が
音声学の単位で悩んでいる事を聞き
毎日、先生のお宅に何かを持って多
人数で頼みに行けば、近所のでまゑ
先生も考えざるを得ないだろうと悪
知恵をつけた事を想い出す。一年間
音声学の単位取得のための時間、経
費と労力を考えたら、どちらがいい
か判るだろうと後輩をけしかけたこ
とが想いおこされる。

光畑先生の英作文の試験は月刊雑
誌をばらばらにして各自にその一枚
と用紙とを配りその雑誌の記載されて
いる内容を時間内にできた英文を用紙
に、それと雑誌の一枚を添えて提出、
何を試験場に持ち込んでよい試験で、
本当に実力を試す試験方法で、なか
には和英、英和辞典等四、五冊を机の上

に置き、調べている内に時間が無くな
り二、三行で終わっている人も見掛け
られた。

時田先生の時事英語の授業は、前期
にはライフ、後期にはリーダーズダイ
ジェストの雑誌を使用し、先生は虫眼
鏡を使い英文のあたまから、どんどん



画家 美田明 織 回12家

和訳。特に、学術会議の席上での通訳
がなつとらんと批判された。先生の授
業をうけて納得させられた。私には先
生の和訳の方法が非常に役立った。試
験もライフ、リーダーズダイジェスト
のいくつかの頁から時間内に大体でき

る位の数の選択出題で、矢張り何を持
ち込んで良いもので、調べているう
ちに時間が無くなつた人もみかけられ、
本当に実力を計る試験であつた。一方、
教科教育法の授業では、特に落第者を
出さない様に常にトコロテンの様に社
会に押し出すこと、若しも落第者を出
した場合、社会と本人の人生に対し
て多大な損害を醸し出す故、常に問
題を作成するとき誰でも解答できる
問題を六十%以上、普通の授業と教
科書の勉強で八十%から八五%、そ
れ以上は本人の努力で九五%とし、
一〇〇%は先生で、教わる側の生徒
の一〇〇%は有り得ないと講義され
た時田先生の想い出が浮かぶ。

柳生先生は我々が二年の時來校さ
れ、洋行帰りの新進の背の高い意欲
に燃えた青年に映つた。我々のあいだ
では柳生先生は国際基督教大学の教授
に迎えらるる予定だつたと噂されてい
た。先生には木造の一階建での教室で
英文法を習つた。よく色々な学説を知つ
ており、その学識の豊かさを表してい

た。和訳一つにしても同じ辞書を用いて、何でもこんなに皆さんとの間に表現の巧拙があるのかとよく言われ我々も奮起したものだ。英文法の試験は何月何日のジャパンタイムズをもって来る様にいわれ、問題はジャパンタイムズの最後の頁のエデトリアル(社説)のコラムの文法的解析であった。本当に普段から実力を養っていなければならぬ、実力を見る名試験であった。入学試験も何でも持ち込み可の試験をかしらなければ試験中の試験官の監視も必要がなく試験方法に何か工夫がなされるべきではないかと想う。

小滝先生も洋行帰りで、マスターデグリー(修士)を取られた優秀なる教授で、結婚間もない中、よく我々に家事は何一つできないと洩らし、可愛らしい小柄の女性で英文学を教えていた。英詩も日本の五、七、五の様に韻をふむことを教わったことが想いだされる。英会話は宣教師のニコルソン夫妻でバイタリティに満ちた全員参加の息をつかせぬ授業であった。柴先生

の講義でこの次の戦争は産業、地理面から中東にて起き得る可能性があると言われ、講義され中東関係の争いが起きる度に柴先生の講義を想い出す。

体育は我々が夏休み中に尾瀬沼行きを企画し、その結果を写真に収めて学校に提出し、体育の実技時間に認知されていた。我々学生と云えば、当時、米軍の基地に勤務していた者が殆どで、通訳・翻訳者として働いている者もおり光畑先生もよく生徒と張り合おう言葉がでて、生徒が倒れるか、自分が倒れるかをたまたま云われ、君達の英語は進駐軍英語のごまかした話し方だとよく云われた。

学生の中にはフランス領事館にてフランス語を習っている学生がいて、先生より進んでおり授業に出ずに終わったものもいた。又、講師の方も、我々が毎日、米国人と現場で一緒に働いていたので英語の知識とのギャップを考え相当に勉強されていた様子であった。

我々が卒業の年(昭和二九年)短大

が三春台より六浦へと移転の問題が提議され、学生大会を開き討議、私が議長役を務め、学校側の責任者光畑先生と折衝し色々な議題を解決した当時を想い出す。特に、移転に対して一年生より通学時間が黄金町駅より金沢八景駅に変わり授業時間に間に合わなくなり出席日数が足りなくなり、単位がとれない懸念が気掛かりと、これは出席日数の件は学校側の規則で、単位の授与の権限は偏に担当教授にありとの回答でけりがついた事が想い出される。とにかく、学生一同、暖房も冷房もなく、充分な教材、参考書も無い当時、教授、講師共一体となって勉学に勤んだ当時は懐かしい。現今の学校の環境は抜群、豊富な教材、機器等がありやる気次第で自分自身を人並み以上に磨きをかけることができる羨ましい時代である。

学校の、益々社会の為に繁栄されんことを祈って筆を置きます。

実体験型取材

— 新学内の紹介 —

(経10) 浦上 恵

『新しい靴を履いた時のように』

「もっと先へ進みたくて、ずっと遠くの方まで見てみたくて、新しい靴を履いた。新しい靴は、きつとステキな未来へ、その先へワタシを導いてくれる。」

二〇〇二年春。気の早い桜がハラハラと散り始めた頃、関東学院女子短期大学は、新しい靴を履いて一歩前へ踏み出した。学生達にとって、もっとステキな学校になるため。

今回は「関東学院大学 人間環境学部」という新たなスタートを切った、この室ノ木キャンパスに潜入取材を決行することになった。学生が居る時間



ネオ・学食にて

帯に、新しいキャンパス内を探検しようというのである。正に「実体験型取材」だ。というか、学生に混じるなんていろんな意味でドキドキだ。(笑)

当日はあいにくの雨だったが、取材班はウキウキ気分で集合。簡単な打ち合わせを済ませ、まずは腹ごしらえからということでエテルニテ最上階の「ネオ・学食(学生食堂)」へ♪
学食までの道のりを、キャアキャアとスッカリ学生気分を満喫していたワ

タシ達はすれ違った事務次長の中村さんに学生だと思われて有頂天。(まあ、平日の昼間に、ワタシ達が学校に居ること自体が不自然なんだけれど。)

学食へ到着して、まず始めに驚いたのはメニューのサンプル。レストラン並みですよ、奥さん、メニューのレパトリリーもずっとオシャレに増えて、どれを食べようかいつも以上に迷ってしまった。結局、Bランチを注文。おいしかったのは言うまでもないが、その量。やっぱり、男子生徒も入学したということもあるのか、量が多かったように思う。さすがのワタシも少し残してしまいました。：。ゴメンナサイ。：。
そして、エテルニテ最上階ということもあり、学食からの眺めは最高です。海側に面したテーブルはやはり人が高く、先に埋まっています。八景の海が一望でき、野島や八景島シーパラダイスも見える。こんな所で食事した後、ワタシには、午後の授業に出る自信がありません。：。

さて、お腹もイッパイになったところで、新入生何組かに「突撃リポート」を試みました。

「関東学院 人間環境学部」を選んだ理由と、今現在の校内の雰囲気についてなど、いくつかの質問に、学生達は快く答えてくれました。

やはり、学校推薦で入学してきた学生がほとんどでしたが、中には受験で入ってきたと言う男子学生もいました。ありがたいことに、この「人間環境学部」、倍率が大変高かったそうです。どうやらこの「人間環境学部」はとても華やかなスタートを切ることができそうです。

学校内の雰囲気はとてもイイと、学生達は声を揃えて言ってくれました。そして、校内はとてもキレイでした。それは、お掃除をして下さる方達だけの努力ではなく、学生達もキチンと心がけているようでした。当たり前のことだけど、素晴らしいことです。

いろいろな学生達にお話を聞いている内、二人の国文科の短大生にお話を



あっ♥ 男子学生だ！

聞かせてもらうことができました。

やっぱり、短大生は相変わらず忙しい（課題が盛沢山だしね）、自分たちの学年で終わってしまうのは少し淋しいと話してくれました。でもノメリットもあるんですよノ学生の人数が減った分、授業を小人数（中には三人という授業もノ）で受けられるため、とても贅沢な授業を彼女たちは受けているですよ。その代わり、必ず先生に当てられてしまうというのがデメリット

だとは言いません…。というか、言えません…。(汗)

新しく設備を入れ替えた教室は、やはりちょっとだけ雰囲気が違う様な気がしました。でも、食堂内に響く学生達のおしゃべりな声や、中グリーンを吹き抜ける風や、その空間は変わらないものなのだと思います。前号のこの「実体験型取材」で最後に私が書いたワンフレーズを覚えてるでしょうか？

『それは、いつも何気ない風景だった。そこは、いつも当たり前空間だった。』

けれど、かけがえの無い場所だった。そしてこれからもそれは変わらない。』

やっぱり、いつの時代も、「関東学院」が学生達にとってかけがえのない場所だということは変わらないのです。

最後は学生達に混じって、ワールドカップの試合を、エテルニティFの大スクリーンで観戦するという、コレも

また貴重な経験で幕を閉じた今回の実体験型取材。

自分の夢を叶えるために、目的を持って入学してきた人。漠然とした自分の夢を形にするために入学してきた人。夢を見つげるために入学してきた人。まだ十九才の様々な学生達の、人生観を聞かせてもらいました。

彼らは、まだ二十年に満たない人生経験から、その何倍もあるこれから先の自分の人生のために選択をしなければなりません。社会に出てはじめて必要だったと分かることは山ほどあります。実際、私は何度もそういう経験をしました。

自分の思い描いていた通りの未来が切り開けるといふ人は、どの世界にもほんの一握りだと思えます。夢を叶えるために、必死で努力しても、その現実には打ちのめされそうになって、でも、何度も立ち上がって前に進む。それはとても辛いことだし、諦めてしまう人の方が多いかもしれません。でも、「若さを持っている人」にしかできない

いとても贅沢な努力だと思ふのです。この「若さを持っている人」というのは、単に年齢が若いというだけのことではありませんよ。いつまでも若々しい人、初心を忘れない人という意味です。ですから、今、コレを読んで下さっているあなたも、もちろんワタシも、それを、今回の取材で学生達に教えられたような気がしました。

「このままで平気か？」と思ふこと



最後の短大生と…。国文科演習室にて

が、人生には何度もあるのだと思えます。でも、その度に、自分でこの先の道を見つけて出して進んで行く。時には歩いてきた道を振り返りながら。休憩も必要です。足元の石ころに躓かない様にするのも大切ですが、空を見上げることも、周りの景色を楽しむことも大切。そして、もしも、「疲れたなァ。」と思つた時は、靴を履き替えて下さい。新しい靴に。新しい靴は、きっと自分をステキな未来へと連れていってくれるはずですから。

速足は禁物です。自分のスピードで自分が幸せになれる場所へ行きましょう。

だって、ワタシ達はみんな、まだ若いのですから!!



ハンソン山から



先生方にアンケートを戴きました。この仕事に携わって良かった事は何ですか？ 先生方の本音が…。



国 文 科
岸 正 尚 先生

人達と話せる。

・教える事が好きで、自分の好きな事で生きていける。

◎短大が四大になり、国文科がなくなる事についてどう思いますか？

・現実が変わったのだから、積極的にみていく。卒業生が「もう一度戻ってみたい」と思える場所にしたい。

◎これから何を研究していきたいですか。

・尊敬する先生が万葉集を研究していたので自分が興味

を持つきっかけとなった。これからは今までのものを土台に、東アジアという広い分野に目を向けて、新しい自分を探して行きたい。



幼児教育科
照 沼 晃 子 先生

仕事として大手を振って携わらせて頂いている。ピカソやクレーなど人々から愛されてきた芸術家は、生涯子どもの時の心を失うことなく、その心の声を聞きながら創作活動が続けることができた。子どもの邪念のない目で見えた世界は、稚拙な表現であるからこそ一層眩しい「美」が存在しているように感じられる。それは、技術のない無心な心で表現された世界の眩しさである。本来、表現という世界は技術に頼る物ではない。天才でもない私が失ないそうになる無垢な心を、幼児の造形やその姿に思い出させてもらい、ついつい曇って行きそうな心を反省している毎日である。



英文科

Ms. Sarah L. Nishi

Teaching a language that is one's mother tongue is at once challenging and fascinating. The challenge with Japanese students is overcoming their horror of mistakes and ridicule. The fascination is the misconceptions and misunderstandings about one's culture. I frequently find myself explaining why the English do not celebrate July 4, for example.

When I started teaching eighteen years ago, overcoming the first problem mentioned above was just about impossible and I had language classes that were so quiet you could hear a pin drop! Happily this has not been my experience at Kanto Gakuin. In fact, quite the opposite is true. Getting the students to stop talking has always been a major challenge. This energy and vitality has enabled me to encourage students to speak both to me and to each other in English and, although often feeling that I have just run a full marathon, after a 90-minute class I also feel that something has been achieved. Each day is a new day with different students and different problems, but the one constant is the smiles, the 'back-chat' and the banter of the students - a constant source of consternation and amusement for me. At the end of each day as I flop into my bath, I feel totally exhausted yet privileged to be able to teach my mother tongue and with it, some of my British culture, to a handful of Japanese youths who know a little about the United States and think that Britain is the same. I remain very grateful to Kanto Gakuin for giving me the opportunity to do this.

自分の国の言葉を外国人に教える事は戦いを挑むことであると同時に魅力を感じさせられる事でもあります。外国語の学習をする際、日本の学生は、間違うことを極端に恐れ、友達が間違うと冷やかして笑います。それを無くそうとする事が私にとつての挑戦でした。では魅力は何だったのでしょうか。文化が異なる故に生じる考え方の相違や誤解に気づく事です。例えば私はしばしば何故英国人は七月四日(米国の独立記念日)をアメリカ人が祝うように祝わないのか説明しました。

私が十八年前教師を始めた当初、前に述べた第一番目の問題に挑戦を試みる事は不可能でした。私の英語のクラスは針が一本床に落ちててもその音が聞こえるほど静寂そのものでした。幸いな事に関東学院ではそのようなクラスを教えた経験はありません。事実、正反対な経験でした。むしろ教室で学生を静かにさせる事に挑戦しました。学生が私に対しても、生徒同士も英語で話しかけ、おしゃべりをするようにと、相当な体力とエネルギーを使っての挑戦でした。ですから九十分の授業の後、私はマラソンを完走した後のような疲れを感じましたが、何かをやり遂げたとする満足感にも浸ったものでした。毎日が違う学生との出会いに思え、異なった問題を感じる新しい一日でした。ただ一つ変わらないのは私に向けてくれた学生たちのあの笑顔であり、彼女たちの即妙な応答であり、相変わらず相手の間違いを冷やかす仕種でした。私にはそれらが驚きと楽しみの泉でした。一日の終わりにお風呂に飛び込み、どっと一日の疲れを感じながらも、アメリカを多少は理解し、英国の文化も同じだと思っっている一握りの日本の若い学生に接して私の国の言葉を教える事の出来る魅力に酔い、幸福感に浸る毎日でした。このような機会を私に与えて下さった関東学院への感謝の思いはいつまでも残るでしょう。(要約 佐々木晃 中・高元教諭)



共通科目
折橋 徹彦先生

たばかりの時でした。そのころは、日本の大学だけではなく、世界中の大学で、学園紛争で大荒れでした。女子短大へは、一度、心理学の先生に呼ばれて、学園祭に話をしにきたことがあります。E・フロムの『自由からの逃走』の話をしました。次に短大で話したのは、林淳三先生に呼ばれて生活文化研究所で話をしたときでしたが、当時、参加していた文化庁でやった「芸術家の調査」の話をするつもりでしたが、結局、女子短大から文学部に移籍されて活躍した小滝奎子先生の話が中心になってしまいました。文学部と女子短大は人的交流が多かったのですが、今年、短大の改組で発足した人間環境学部をつくるにあたっては、女子短大から国文科や幼児教育科の先生が文学部に移籍され、文学部と法学部そして経済学部から新しい学部に移籍されるというように、学院のなかでの人事交流が盛んに行われました。これからは、日本の教育機関の再編成の時代で、学院内でも、このような人事交流は、ますます盛んになると予想されます。

●大学に生涯学習センター新設

今年度後期より、公開講座と健康スポーツ講座を一般に開講します。

香葉会の皆様・家族・お知り合い対象の募集講座は



「ラグビー講座」

9月21日(土)～各土曜日13回

「地震と防災」

10月19日(土)～各土曜日6回



「カウンセリング講座」

10月19日(土) 11月16日(土) 12月7日(土) 幼稚園・保育園の教諭対象



「パソコン教室」

10月5日(土)～各土曜日8回

「ファンタジーの世界」

10月以降(日にち未定)



2003年4月からは資格講座・公開講座・スポーツ講座を多数ご案内

●問い合わせ● 関東学院大学生涯学習センター フォーサイト8階
電話 045-786-7892

母校ニュース

▽新学部入学式

平成十三年十二月、関東学院女子短期大学は文部科学省から改組転換の認可を得て平成十四年四月二日、関東学院大学人間環境学部としての入学式を横浜国際会議場で挙行了しました。

既存の文学部、経済学部、法学部、工学部に続く第五番目の学部として共に新入生を迎えました。希望に満ちた新入生は総数三千四百名。人間環境学部第一回生は七四七名で、うち約二八〇名が男性です。新しい短期大学の将来にご支援、ご鞭撻をお願いいたします。

▽人間環境学部開設披露式典開催

朝からの雨が式典開始と共に上がり青空の広がった五月一八日(土)人間環境学部の開設披露式典が開催されました。

当日はチャペルでの式典後、新棟エテルニテで披露パーティーを開催し、

人間環境学部の発展を祈念すると共に、ご尽力いただいた皆様に関東学院から感謝の意が表されました。

▽関東学院クリスマスコンサート

本年も「オール関東」のクリスマスコンサートを下記のとおり開催いたします。

記

日時 平成十四年十二月十六日(月)

十八時開演

場所 みなとみらい大ホール

詳細及びお問い合わせは香葉会事務室へお願いいたします。

電話 〇四五―七八七―七八五九

FAX 〇四五―七八七―〇六七八

家政科卒業生のみなさまへ『室木』についてのご案内

すでにご周知のとおり、女子短期大学改組転換により本年四月、新学部、人間環境学部が発足いたしました。現在は短期大学二年次の学生を残し、新体制と併行して教育を行っております。家政科では室の木校地に移つてのち、

学生の年度の成果発表を目的として雑誌『室木』を年一回発行してまいりました。しかし、このような事情により

本年度二十三号(平成十五年三月発行予定)をもって廃刊いたします。最終号となる本号ではその記念的な意義から、従来の内容に加え、家政科の歴史、母校によせる卒業生のみなさまからのひとこと、またこれまで本科の教育に携わってまいりました教職員らが想い

出をつづります。家政科の歴史に貴重な足跡を残してください。卒業生のみなさまに感謝申しあげ、本号をご希望の方には謹呈させていただきます。存じます。左記要領にてお申し出くださいませ。

★お申し込み方法と内容

お名前、ご住所、郵便番号、連絡先電話番号、卒業年次を明記のうえ、ファックスにて、関東学院女子短期大学家政科『室木』担当宛にお送りください。

FAX番号 〇四五(七八八)九八三二

平成 13 年度 決算				平成14年度予算
収 入 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
会 費	(@18,000×893名) 16,074,000	16,074,000	0	(@18,000×712名) 12,816,000
賛 助 金	500,000	1,145,680	645,680	500,000
預 金 利 息	3,000	530	△ 2,470	1,000
雑 収 入	5,000	0	△ 5,000	5,000
前 年 度 繰 越 金	3,167,448	3,167,448	0	2,208,101
合 計	19,749,448	20,387,658	638,210	15,530,101

支 出 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
通 信 費	3,500,000	3,269,962	230,038	3,200,000
印 刷 ・ 製 本 費	2,200,000	2,066,944	133,056	2,200,000
総 会 ・ 会 合 費	2,400,000	2,271,463	128,537	1,500,000
交 通 費	550,000	514,730	35,270	500,000
用 品 費	200,000	200,000	0	800,000
委 託 費	1,000,000	611,740	388,260	200,000
謝 礼 費	150,000	150,000	0	100,000
消 耗 品 費	100,000	61,161	38,839	100,000
人 件 費	1,600,000	1,296,544	303,456	1,500,000
合同同窓会分担金	(@300×893名) 267,900	267,900	0	(@300×712名) 213,600
新人会員歓迎費	1,300,000	1,073,572	226,428	900,000
慶 弔 費	300,000	299,551	449	300,000
寄 付 金	200,000	200,000	0	200,000
雑 費	81,548	45,990	35,558	16,501
予 備 費	100,000	50,000	50,000	100,000
特 別 会 計	5,000,000	5,000,000	0	3,500,000
名簿発行準備金	0	0	0	0
奨 学 金 基 金	800,000	800,000	0	200,000
(小 計)	19,749,448	18,179,557	1,569,891	
次 年 度 繰 越 金	0	2,208,101	2,208,101	
合 計	19,749,448	20,387,658	638,210	15,530,101

▼回を重ねた編集会議、春から始まって真夏の校正、やがて真白な紙面が活字で埋まり「香葉」という冊子が産まれる。ワイワイガヤガヤ楽しいお喋りと共の作業をし乍らもうこうした形の「香葉」の編集が今回最後というスタッフ一同共通の一抹の淋しさは覆うべくもなく、胸の奥をヒューと風がよぎるのです。でも新しく生まれ変わる母校に未来を託し、その旅立ちに寄せるエールと万感の想いをこめて最後の「香葉」お届けできること嬉しく存じます。そしてそれに携わることが感謝致します。香葉会の皆様今迄のご協力有難うございました。(A・K)

▼卒業して十年、ある時から香葉会のお手伝を始め、このころ「香葉」の編集に携わって来ました。企画・取材・校正と年代の差なく短大のあの頃に戻った様な気分になり、そして又若さの秘薬にもなり、楽しい編集会議を持って良い思い出ができましたこと嬉しく思います。いよゝこの小冊子もこの号で短大と共に幕を下し、学校が四年制となり香葉会の同窓生の「おしゃべりの場」として新しい機関誌が出来たら良いと思えます。皆様手に取って読んで頂くことが喜びと励みです。(A・M)

▼キャンパスに若い息吹きが漂う頃、若葉が瑞々しく美しい時、雨に映える紫陽花に心が和み、蝉時雨の中通った編集委員会。幾度これらの季節節と巡り会っただろうか。企画、少しずつ集まる原稿。そしてこれらを通して世代を越えられた方々との出会い嬉しいものだった。更に校正の手は進む。皆様の喜ぶ顔を想像しつつ。そして澄みきった青空の元、発行となる。卒業生と母校を結ぶ掛け橋としての「香葉」の編集に携われたことに感謝の気持ちで一杯です。(K・O)

▼えっ！と！思い出あり過ぎて//楽しい編集会議。でき上った時の感動を誰よりも先に……。ウフフ……。(Y・K)

▼今回は、自分自身を見つめなおすような「実体験型取材」になりました。これをきっかけに、私も新しい靴に履き替えようと思えます。その靴を探るのは、とても大変かもしれませんが、時間もかかるかもしれません。でも、その先の、そのまたずっと先にある、私の未来を見に行く為に、妥協せず、時間をかけて、理想の靴を探そうと思えます。(M・U)

編集 雑感

▼短大を卒業して早4年。4年もたつのにそんな気がしないのは、編集委員会のために短大に通うのが楽しみで、まるで自分が学生でいるかのような気分になることができたからだと思えます。また、香葉の編集を通して、色々な事を学ぶことができたり、取材をしたり、普段の生活の中でできないような経験をたくさんすることができ、感謝の気持ちで一杯です。(T・K)

▼編集委員もあつたという間に4回目。6月は取材。"そろそろ校正"と編集の仕事に季節感を覚える様になってきました。今回は平日の学内も探検させて頂き、短大が生まれ変わるうつつしているのを実感。"香葉"も来年から姿を変える事になるかもしれませんが、今まで以上に卒業生と母校を繋ぐ存在になっていけたら♥と思います。(N・B)

▼「香葉」編集会議でのみんなの真剣な表情、そして笑顔は私にとって、楽しい、大切な思い出となりました。この「香葉」を読んで下さった方々の思い出の扉をノックできた嬉しんでいます。交流の場をお手伝いしていきたく思っています。編集委員会に参加させていただき、ありがとうございました。皆様感謝です。(M・Y)

▼なかなか都合がつかず、皆さんのお役に立てたかな??と反省すると同時に、今回も素敵な香葉が出来上がった喜びでいっぱい。今回は、短大から四大へと生まれ変わったということもあり、短大での思い出が走馬灯の様に頭に浮かび、これから作られる歴史に希望と期待を感じ、そんな「香葉」のような気がします。最後に、編集委員として参加させていただきましたことに感謝し、心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。(N・Y)

▼学校の発展的改組に伴ない「香葉」も31号で冊子としての発行は最後となります。今まで「香葉」を支えてきた方々、記事を寄せて下さった学長、会長、上市先生、卒業生に、講演会、座談会等取材に依りてくださった方々に、そして最さや忙しい仕事の合間に編集に携わった多くの方々に溢れる程の思いをこめて感謝致します。その時々何でもないような報告は多くの卒業生に今も学生であった心を思い起こさせる内容であったと推察しています。今後はもう少し重さを感じています。今後はもう少し簡単な形で、学校や卒業生のことなどお知らせできればと考えておりますが、その際にはどうぞご支援よろしく願っています。(編集長 Y・Y)



先輩諸姉へ求人のお願い

本学卒業予定者の就職活動につきましては平素より暖かなご援助、ご協力をいただき感謝申し上げます。

学生達は将来への希望を胸に企業の扉をたたいておりますが、昨今の社会情勢の中、女子学生への門戸は大変厳しいものになっております。

つきましては、先輩方のご関係で求人のお話がありましたら就職課へぜひお知らせくださいますようお願い申し上げます。

〒236-8503 横浜市金沢区六浦東1-50-1 Tel (045) 786-8561
関東学院女子短期大学就職課 Fax (045) 781-1491

香 葉 第 31 号

平成14年10月1日 印刷・発行
関東学院女子短期大学・香葉会
代表者 古城 房子
横浜市金沢区六浦東1-50-1 郵便番号236-8503
関東学院女子短期大学内
Tel (045) 787-7859
Fax (045) 787-0678

関東学院同窓会・香葉会誌